

# 「私たちのちかい」を味わう

満井 秀城



本願寺派総合研究所副所長  
本願寺派司教

ご門主が、「中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗のみ教えにあまり親しみのなかった方々にも、さまざまな機会でご唱和していただきたい」と、ご親教「念仏者の生き方」の肝要を4カ条にまとめられた「私たちのちかい」。その言葉に親しみ、味わいを深めるため、本願寺派総合研究所の満井秀城副所長に執筆いただきました。

一、自分の殻に閉じこもることなく  
穏やかな顔と優しい言葉を大切にします  
微笑み語りかける仏さまのように

「生きづらさ」がキーワードとなっている現代社会は、他者とのコミュニケーションに疲れ、その必然として、他者との関わりを避けたがります。「自分の殻」は、その苦痛に対する自己防衛として形成されたとも考えられ、苦悩は察するに余りありません。

しかし、私たちは、誰一人として、他者と関わりせず、自分一人で生きていくことはできません。まさに、「縁起的存在」なのです。「華嚴経」に「因陀羅の網」という譬喩があります。その網は多くの宝石の珠で作られ、一つの珠には、他の珠すべてが映っています。それが、お互いの関係性を表しています。一方で、一つ珠が欠けてなくなるとしたら、「網」でなくなります。つまり、一つひとつは、かけがえのない存在でもあるのです。

## 私たちのちかい

- 一、自分の殻に閉じこもることなく  
穏やかな顔と優しい言葉を大切にします  
微笑み語りかける仏さまのように
- 一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず  
しなやかな心と振る舞いを心がけます  
心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけを大事にすることなく  
人と喜びや悲しみを分かち合います  
慈悲に満ちみちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき  
日々「精一杯」つとめます  
人びとの救いに尽くす仏さまのように

「殻」が自己の価値基準に閉じこもるものであるなら、「殻」で身を守るのではなく、殻を開いて、他者と関わりながら、自分の生き方を見つけてほしいと思います。

昔の譬え話に、こんな話がありました。ある員は、とても丈夫な殻を持ち、外敵が襲ってきたらすぐ殻を閉じ、「自分は最強だ」と思っていました。ある時、海に網が投げられ、「敵だ」と思い、いつものように殻を閉じて防衛しました。しかし気がついたら、魚屋の店頭に並んでいたという話です。自己防衛の「殻」も無敵ではありません。

別の側面で言うと、「自分の殻」は、信心や念仏を、自分の世界だけで完結させてしまっています。信心や念仏の喜びは、他者に向かってもはたらくのです。親鸞聖人は『教行信証』に、阿彌陀仏の救いを「磁石のくわて」(註釈版聖典「20」)と示されます。そして、その所以を「本願の因を吸ふがゆゑに」と述べられます。

釘が磁石の磁力によって引き付けられた時、今度は、その釘に伝わった磁力で別の釘を引き付けます。私が阿彌陀さまの磁場となった時、私の側には本来なかった、「穏やかな顔と優しい言葉」が出てくる身に育てられるのです。阿彌陀仏の「微笑み」を思い、幸せの「おすそわけ」を、人にも伝えていきたいものです。

一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず  
しなやかな心と振る舞いを心がけます  
心安らかな仏さまのように

「むさぼり、いかり、おろかさ」は、煩惱の代表とも言える「三毒」です。念仏申す身になっても、煩惱がなくなることはありません。死ぬまで「煩惱具足」の身であることは、何も変わりません。親鸞聖人が、『一念多念文意』に、

無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、いかに苦しむべきか、たえず

と述べられる通りです。その一方で、念仏者は何も変わらないのかというと、例えば、迷信には惑わされなくなったりという明確な変化も自覚できます。

法然聖人は、煩惱をば心のまら(客人)とし、念仏をば心のあるじとし(『和語灯録』)と述べられ、蓮如上人も同様の意を、『蓮如上人御一代記聞書』に、

弥陀をたのめば南無阿彌陀仏の主に成るなり (註釈版聖典「309」)

と説かれています。私たちの不実な煩惱を自らの主とせず、南無阿彌陀仏を主とするのが、念仏者です。親鸞聖人もまた、

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て (同「473」)

と、自らの立脚点を「弘誓の仏地(阿彌陀仏の本願)」に置く慶びを語っておられます。

一、自分だけを大事にすることなく  
人と喜びや悲しみを分かち合います  
慈悲に満ちみちた仏さまのように

私たちの自己中心性は、他者を蹴落とし自分だけが優位に立とうとします。そういう競争社会の中に、否応なく投げ出されているのが現代と言えます。

学校では成績偏重で、「受験」はまさに「競争」です。会社でも、「出世」は競争原理に



宗門校・東九州龍谷高校(大分県中津市)では、毎日の終礼で「私たちのちかい」を唱和している。写真11月8日に同校で行われた扇城学園創立120周年記念式典で、「私たちのちかい」を暗唱する同校の生徒

支配され、ライバルを蹴落とす椅子取りゲームの状態です。経済も、「自由競争」の美名の下に格差は拡大の一途で、「勝ち組、負け組」という言葉も流行りました。「いじめ」や「差別」も、他者を傷つけ、自分が優位に立つとするあり方です。

大乗仏教の基本精神は、「自利利他」と言われています。それも、「自利」を仕上げたからの「利他」ではなく、「利他」あってこそ「自利」です。その最も完成された形が、阿彌陀仏の「若不生者、不取正覺(衆生を救わずしては、自らもさとりをひらかない)」の誓いでしょう。私たちに、阿彌陀仏の真似はとてできませんが、「いじめ」や「差別」で他者を傷つけても、決して勝者にはなりません。他者を傷つけることで、自分自身の値打ちを下げて、自分も傷つけているおろかさ気が付かねばなりません。

一、生かされていることに気づき  
日々「精一杯」つとめます  
人びとの救いに尽くす仏さまのように

人々の孤独感の一つとして、「何のために生まれてきたんだろう」、「好きで生まれてきたんじゃない」、「自分なんか生まれてこなきゃよかった」などの悲痛な声を聞きます。しかし、人間ほど育児期間を長く要する動物はいません。家族や友人だけでなく、学校や病院といった社会施設など、自分の気付きが、さまざまなおかげによって生かされているのです。

私たちに、人それぞれの持ち分や個性があります。阿彌陀仏は私たちに、できないことを求めはされません。しかし、できるとわかっていてしないのは、ただの怠慢です。できることを「精一杯」に努めさせていただくのです。私たちの感謝は、「もうこれでいい」というゴールはありません。返しても返さなくてもいい恩には、不断の精進をもって報いる他ない厳しさがあるのです。